

多く赦された者は、多く愛する

ルカの福音書 7章 36-50節

はじめに

月に一度の「ウェルカム・サンデー」では、ルカの福音書から「イエスに出会った人」を取り上げてお話をしています。今日の聖書箇所が登場してくるのは、「パリサイ人シモン」と「罪深い女」です。この二人を巡って、「罪の赦し」についてイエス様が教えておられます。

1. 罪深い女のイエスに対する愛

ある時、「シモン」という「パリサイ人」が、イエス様を食事に招きました。パリサイ人というのは、ユダヤ教の一派で、旧約聖書の律法を厳格に守る人たちでした。シモンは、イエス様のことを「預言者」と考えたようです。ですから、イエス様を自宅に招いて、色々と話を聞きたいと思ったのでしょう。

するとそこに、「一人の罪深い女」が突然入って来て、イエス様の足を自分の涙でぬらし、髪の毛でぬぐい、さらにその足に口づけをして、香油を塗ったのです。「罪深い女」とありますが、彼女はどんな罪を犯した人なのでしょう。福音書の中で、「罪人」と呼ばれるのは、「取税人」や「遊女」です。ですから彼女はおそらく「遊女」、つまり「売春婦」だったのでしょ。39節を見ると、シモンも彼女のことを知っていたようですし、37節には「**その町に一人の罪深い女がいて**」と表現されていますので、おそらく彼女はこの町では有名な、誰もが知っている売春婦だったのでしょ。

彼女がイエス様にしたことは三つのことです。一つはイエス様の足を洗うことです。彼女は、水でイエス様の足を洗いタオルで拭いたのではなく、自分の涙でイエス様の足を洗い、自分の髪の毛でイエス様の足を拭いたのです。38節に「**泣きながらイエスの足を涙でぬらし**」とありますが、この「ぬらす」という言葉は、他の個所で「雨を降らす」と訳されるギリシヤ語が使われています。ですから彼女の涙は、雨のように流れていたのです。大量の涙で、イエス様の足をぬらしたのです。まさに号泣です。決して静かな涙ではありません。嗚咽をするような、大声を上げるような涙です。足を洗うということは、「仕えること」を意味します。彼女はイエス様に「仕えた」のです。

第二に、彼女はイエス様に口づけをしました。通常、口づけは頬にしますが、彼女はイエス様の足に口づけをしたのです。「口づけ」は「愛すること」を意味します。彼女はイエス様を「愛した」のです。彼女のイエス様に対する「愛」は、「アガペー」というギリシヤ語が使われています。男女の「愛」を表現する「エロース」という言葉ではありません。彼女のイエス様に対する「愛」は、男女の「愛」を越えた「愛」なのです。

第三に、彼女はイエス様に香油を塗りました。香油も、通常は頭に塗りますが、彼女はイエス様の足に香油を塗ったのです。石膏の壺を持って来て、「香油を塗ること」は「献げること」を意味します。彼女はイエス様に、自分の持っている物を「献げた」のです。

このように彼女は、イエス様に仕え、愛し、献げたのです。しかも、大粒の涙を大量に流しながら、激しい感情を込めて、イエス様への愛を最大限に表現したのです。

2. イエスのシモンに対する言葉

しかし彼女の姿を見たパリサイ人シモンは、心の中でこんなことを思ったのです。39 節です。「**この人がもし預言者だったら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っているはずだ。この女は罪深いからだから**」。シモンは、イエス様が本当に預言者なら、彼女がどんな人間で、どんなことをしてきた人間かを見抜けるはずだと思ったのです。そして見抜いたなら、彼女を遠ざけるはずだと思ったのです。なぜならパリサイ人たちは、罪深い人たちとの関わりを持たなかったからです。罪深い人たちに触れると、自分たちも汚れると考えたのです。

「パリサイ」という言葉は、「分ける」「区別する」という意味があります。パリサイ人たちは、罪深い人たちを見下し、彼らとの関わりを避け、彼らと自分たちを「区別した」のです。否もはや「差別した」と言ってもよいでしょう。

今日の聖書箇所の大半は、パリサイ人シモンに対するイエス様の言葉で占められています。イエス様は、彼女の行動を問題とするのではなく、シモンの心の思いを問題とされるのです。イエス様は、彼女の問題よりも、シモンの問題の方がより深刻だと考えているのです。

イエス様は、シモンに一つのたとえ話をされます。ある金貸しから、二人の人がお金を借りていたのです。一人は 500 デナリで、もう一人は 50 デナリです。1 デナリは、当時の労働者の一日分の給料に当たります。仮に 1 デナリを 1 万円とすると、一人は 500 万円の借金、もう一人は 50 万円の借金です。二人が返済できなかったので、金貸しは二人の借金を帳消しにしてあげたのです。そこでイエス様はシモンに、こう問いかけます。「**それでは、ふたりのうちのどちらが、金貸しをより多く愛するようになるでしょうか**」。シモンは、「**より多くを帳消しにしてもらったほうだと思います**」と答えると、イエス様は「**あなたの判断は正しい**」と言われます。

このたとえ話でイエス様が伝えようとしていることは、「多く赦された者は、多く愛するようになる」ということです。44-46 節でイエス様は、シモンと彼女を比較しています。シモンは足を洗う水をくれなかったが、彼女は涙で足をぬらし髪の毛でぬぐってくれた。シモンは口づけしてくれなかったが、彼女は足に何度も口づけして止めなかった。シモンは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、彼女は足に香油を塗ってくれた。イエス様は、シモンと彼女の、イエス様に対する愛の大きさを比較しているのです。つまりシモンのイエス様に対する愛は小さく、彼女のイエス様に対する愛は大きいと。

ではなぜ、彼女のイエス様に対する愛は、こんなにも激しく大きいのでしょうか。またなぜシモンのイエス様に対する愛は、こんなにも小さいのでしょうか。47 節でイエス様は、

こう言われます。「この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです」。彼女は、イエス様に多くの罪を赦されていたのです。だからこそ、イエス様への愛が激しく大きかったのです。ではなぜシモンのイエス様への愛は小さかったのでしょうか。それは、シモンが少しの罪しか赦されていなかったからでしょうか。そうとも言えるかも知れません。しかしもう少し厳密に言うと、シモンは罪が少なかったのではなく、「罪の自覚」が少なかったのです。自分が罪人であるという「認識」が少なかったのです。それに比べて彼女は、自他共に認める罪人です。強烈な罪意識があったのです。だからこそ、赦された喜びもその分大きかったのです。

なぜシモンは、「罪の自覚」「自分が罪人であるという認識」が少なかったのでしょうか。パリサイ人は、律法を厳格に守る敬虔な人たちでした。彼らは、自分たちの敬虔さ、良い行いが、神様の前における借金を減らせると考えたのでしょうか。自分は律法を厳格に守っている、敬虔に生きている、だから神様の前における罪の負債も少ししかないだろうと考えたのではないのでしょうか。彼らも人間ですから、自分には全く罪はないとは考えなかったでしょう。「罪」とは、「神様の律法を守らないこと」です。神様がしてはならないということをする、また逆に神様がしなさいということをしなないことが「罪」と言えます。神様の律法の要点は、「神様を愛すること」と「隣人を愛すること」です。その意味で、「神様を愛さないこと」、また「隣人を愛さないこと」、「自己中心に生きること」も「罪」と言えます。彼らはおそらく、自分には全く罪がないとは考えなかったでしょう。しかし「罪は少ない」と考えたのではないのでしょうか。そして、自分の敬虔さや良い行いが、罪の負債を帳消しにしてくれていると考えたのではないのでしょうか。自分の敬虔さや良い行いで、神様の前における借金を返済できると考えたのではないのでしょうか。

しかし聖書によれば、私たちの罪の負債は、そんなに簡単に帳消しにできるものではありません。アダムとエバが神様に背いて禁断の木の実を食べた時から、私たち人間は罪の性質を持つようになりました。人間は誰でも、生まれながらに罪の性質を持って生まれてきます。生まれながらに、神様に従いたくない性質、自己中心の性質を持っているのです。これを「原罪」と呼びます。その「原罪」から私たち人間は、毎日あらゆる罪を神様の前に重ねていっているのです。私たちは、心の中の思いと言葉と行ないを誠実に探ってみれば、罪を犯さない日は一日たりともないでしょう。私たちは生きてきた年数の分だけ、罪の負債は膨れあがって、もはや自力では到底返せないほど膨大な負債となっているのです。

イエス様はたとえ話で、二人とも「返すことができなかった」と言っています。これは、神様の前における罪の負債は、私たち人間には誰も返せないことを暗示しています。では、私たちの神様の前における罪の負債は、誰が返してくれるのでしょうか。それは、聖書全体が語る最も重要なメッセージですが、神様のひとり子であるイエス様が私たちの罪の負債をすべて肩代わりしてくださったというのです。イエス様が御自身の命を代価として払って、私たちの罪の負債をすべて返済してくださったというのです。それがイエス様の十字架の死の意味です。イエス様は、御自身の命と引き換えに、私たちの神様の前における罪の負

債をすべて支払ってくださったのです。

3. イエスの罪深い女に対する言葉

イエス様は彼女に、「**あなたの罪は赦されています**」と言われました。するとシモンの家に来ていた他の人たちは、こう言いました。「**罪を赦すことさえするこの人は、いったいだれなのか**」。イエス様は、人の罪を赦すことができる方です。それは第一に、神様ご自身であるからです。そして第二に、御自身の命と引き換えに私たちの罪の負債をすべて支払ってくださる方からです。

では、イエス様が十字架の死を通して、私たちの罪の負債をすべて支払ってくださるなら、すべての人の罪が自動的に赦されるのでしょうか。そうではありません。イエス様は50節で彼女にこう言われます。「**あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい**」。「信仰」が彼女を救ったのです。「信仰」が彼女に「罪の赦し」をもたらしたのです。イエス様を神ご自身と信じ、ご自身の命と引き換えに私たちの罪の負債をすべて支払ってくださった救い主と信じる人だけが、「罪の赦し」を得るのです。私たちは、自分の敬虔さや良い行いでは、神様の前における罪の負債を解決することはできません。どんなに聖書を読んでも、どんなに毎週礼拝を守っても、どんなに一生懸命奉仕しても、どんなに多額の献金をして、どんなに慈善活動をして、どんなに社会に影響を与える仕事をして、どんなに良い家庭を築いても、私たちの神様の前における負債は、一向に減らないのです。私たちに残されている道は、神様の前に破産宣告をして、イエス様の肩代わりを受け入れることです。それ以外に、私たちの罪が赦される道は残されていないのです。

おわりに

イエス様は彼女に、「安心して行きなさい」と言われました。私たちの本当の「安心」というのは、どこから来るのでしょうか。健康であれば安心できるのでしょうか。経済的に安定していれば安心できるのでしょうか。家庭が安定していれば安心できるのでしょうか。イエス様は彼女に、「罪の赦し」を宣言してから、「安心して行きなさい」と言われました。「罪の赦し」こそ、私たちに本当の「安心」を与えてくれるのではないのでしょうか。神様に赦されている、神様との間に平和がある、神様が私たちの味方になっておられる、神様がともにおられる、これほど私たちの人生に安心を与えてくれるものはありません。神様が味方であれば、神様が共におられれば、たとえ病気になっても、貧しくても、家庭に問題が起きて、そして死を迎えたとしても、私たちは安心して生きていけるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

聖書によれば、私たちには神様の前における膨大な罪の負債があります。しかし私たちは、それを知らないか、認めないか、敬虔さや良い行いを通して帳消しにしようとしています。しかしイエス様は、「罪の赦し」こそ私たちに本当の「安心」を与えるとされました。また「罪

の赦し」こそ、私たちに愛をもたらすと言われました。私たちには、その負債を返す力がありません。イエス様にしか、イエス様の十字架にしか、それを解決することができません。あなたを信じ、あなたの身代わりの死を受け入れ、あなたにすべてをお任せしますので、どうか私たちのすべての罪をお赦しください。そして、本当の「安心」を、湧き上がる愛を私たちにお与えください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。